

コラム

みやちゃんと ご一緒体験記

Vol.55

予期せぬ妊娠・出産についての考察

先日HDDの整理をしていたら、随分昔に鑑賞して書いたシネマレビューを当時のことを懐かしく思い出しながらよみました。ある時期から映画関連の仕事をしていないので、試写室通いをしておらず、劇場にもあまり足を運ばなくなっているのが現状。2006年1月劇場公開された日本映画「三年身籠る」という作品のマスコミ試写を見たのは、おそらく2005年11月頃。ちょうど、前のコラム(VOL.54 「性と生殖に関する健康と権利」再考)を書いた後、「望まぬ妊娠」云々について触れたため、その結果うまれた子どもが「予期せぬ妊娠で生まれた、望まれない子どもだ」とネガティブ思考に陥ることがないかと危惧していたからか、この作品に目がとまった次第。ということで20年近く前、自身のブログにかいたシネマレビューを(少し修正して)ご紹介させていただきます。

★「三年身籠る」 <https://eiga.com/movie/41588/>

出産をめぐるある家族の寓話……「三年身籠る」

性に違和感をもつ人が自分の性を心だけでなく身体まで変えてしまうことは可能。子宮や卵子がない女性が、他人のモノを使用して子どもを持つことも可能。世界では人間のクローンまで実現させている。倫理的な問題はまだまだあるが、医療技術はめまぐるしく進歩している。だが、胎児が母親のお腹の中にいる期間だけはどうしても短縮されない。これさえ改善されたら、働く女性たちは出産休暇をとってスピーディーに職場復帰でき、深刻な少子化問題の解決に繋がるのではないだろうか。誰だって、早くお腹の子どもの顔がみたいだろうし、膨らんだお腹のままでいたいなんて思う人はいない(はず)。苦しい思いをしたからこそかわいい赤ちゃんの顔を拝めるのは難業を終えた母親にとっては、いわばご褒美だ。

本作は、お腹の中に赤ちゃんが3年間も籠った物語だ。出産時期を過ぎたのに生まれない話は聞いたことはあるが3年間となると異常だ。これはもう、完全に赤ちゃんサイドの意思としか思えない。出産は、この世に出ようとする赤ちゃんの意思と、生み出してやろうとする母親の共同作業だ。本作は、何かの理由で母体に引きこもり体内で発育する赤ちゃんを抱えた主人公・冬子（中島知子）とその家族の飄々としたユーモア溢れるメルヘンチックな物語だ。

郊外の古風な一軒屋に住む妊婦の冬子は夫の徹（西島秀俊）と2人暮らし。ぼんやりした温厚な性格の冬子と夫は、まだ親になる実感が無い。さらに冬子は、（妻が妊娠中だというのに）夫が浮気していることを察知しているが慌てずのんびり構えている。時々、実家にご飯を食べに行く。冬子の実家は女系家族だ。祖母と母（木内みどり）と妹の緑子（奥田恵梨華）が揃うと、女だけの豪華な食卓は賑わう。女達が集まってモノを食うシーンの贅沢さ！ 子どもを産むという女性だけの営み同様、毎日かかせないモノを食うという行為。さりげない日常の描写の中に女性の生理的遅しさを垣間見て楽しい。

冬子の父親の存在は一切語られない。時々、冬子はせっせと投函しないのに父親宛てに手紙を書いている。多分、この家族にとって男は添え物。猫のように子孫を増やすためにだけ男を必要としてきたかのようだ。

それが明確になるのは、冬子の出産が延びてお腹が異常にせりだしているのに、祖母と母は、「育児しなくてよくてラクねー」なんて心配もせずノホホンとしたことを言い、「生まれてくるのは女の子よ」と言うあたりだ。深刻な問題なのに飄然としている家族の反応がオカシイ。さらに、夫の徹は「自分以外のエイリアンと性交したから不自然な形になっている」と真面目な顔をして言い出したりする。当の冬子も自分が望んだことかもしれない、と思ったりする。

ともあれ、異様な形になり動くのも大変、見た人たちにはギョッとされ、冬子の妹・緑子の恋人・海（塩見三省）の勤務先の病院に入院させられさらし者になったりする。いたたまれなくなり、人目をさけるために山奥の静かな別荘に移り出産の時を待つ徹と冬子。日ごとに成長する体内の赤ちゃんは時折お腹を蹴ったり、腹の中で泣き声をあげたりする。

赤ちゃんは永遠に出てこないのだろうか？ 東京から見舞いにきた緑子と海はなんだかギクシャクしている。姉とは対称的な性格の緑子は奔放で感情的で欲望のままに行動する。ちょっとヒステリーで理屈っぽい美人だ。姉の見舞いにきていながら、恋人とうまくいかないからか義兄の徹を誘惑してしまう。優柔不断な徹は拒絶したもののちゃっかり受け入れてしまう。のんびりしているようで何でもお見通しの冬子は静かな、

だが手厳しい方法で緑子を罰する。そして、ついに陣痛が始まった……。

誰でも性交し、妊娠し、出産することは可能だ。許可などいらない。しかし、精神が未熟なまま親になることは動物だってできる。性の倫理が希薄になった現在、親になるという自覚と親業をなすべき責任感をもった精神的に成熟した大人が親になっているかというところではないようだ。大人化していない大人たちに子どもが反旗を翻し、自分で親となる人を<選んだ>赤ちゃんと、予期せぬ異常妊娠によって家族のあり方や愛情の形を<考察>した母親の共同作業とみるべきか。不思議に印象に残る作品だ。

ところで、予期せぬ「望まぬ妊娠」問題がおこりやすいのは、言うまでもなく十代の思春期です。脳科学者の澤口俊之さんは、自身の著書「夢をかなえる脳」で、多くの方がそうであるように、思春期で性的関係をもつことに否定的意見を述べておられます。現代社会では難しい傾向ですが、その理由を科学的根拠に基づいて説明しています。

「相手の魅力（とくに生殖能力の高さや健康さ）を脳は0.5秒以内で判断するということはかなり知られていると思います。ただし、実際の恋愛では、その後高度な脳機能を使うことがわかっています。魅力を感じるのはいわば原始的な脳システムですが、少なくともヒトの場合、高度な脳システム（とくに前頭前野）が働くのです。」

この高度な脳システムが働くことによって、価値観が自分にあるかなどを判断するのです。結婚生活を維持するためには、価値観の一致は最も必要なものです。離婚原因の首位をしめるのは、性格の不一致（価値観の不一致）といわれています。（今頃わかったのですか？と聞きたいぐらいですが、結婚に至った理由はそれぞれ違うものです。）

ところが、性的関係を思春期後期に頻繁にもってしまえば、恋愛において高度な脳機能が働かなくなり将来のための努力が怠りがちになってしまいます。俗な言い方になりますが、性交に溺れることによって脳が麻薬中毒のような状態になると注意を促しておられます。頻繁な性交は避妊していても妊娠のリスクが高く、当事者のその後の人生を（特に十代は）大きく左右します……。

現代は人生百年時代といわれています、人生はマラソンレースです。急がなくても、“その時”はちゃんとやってきますし、性経験の有無を競う必要などありません。老年期にはいつからでも性交可能。実際に「高齢者の性」を扱った作品が注目されています。二度とない思春期は人生の準備期間です。

そして、不安定な十代を見守り導くのは、大人の役割なのは言うまでもありませんよね。

※ 「夢をかなえる脳」(澤口俊之/著、WAVE出版/刊、1400円/本体)